

皮膚科

後期研修医募集



[診療実績] 平成30年

年間外来手術 245件
 年間入院手術 44件
 年間皮膚生検数 638件

[週間スケジュール]

月: AM 外来/病棟
 PM 手術/病棟
 火: AM 外来/病棟
 PM 手術/病棟
 水: AM 外来/病棟
 PM 手術(OPE室)
 木: AM 外来/病棟
 PM 褥瘡回診
 金: AM 外来/病棟
 PM カンファレンス

[概要]

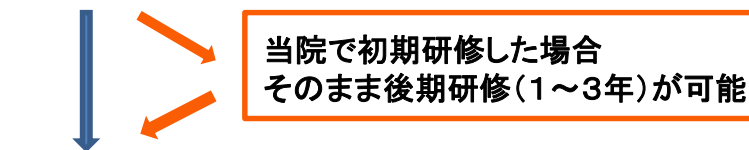
日本皮膚科学会認定の研修施設であり、名古屋大学皮膚科の関連病院である。3名の日本皮膚科学会認定専門医を含む5~7名体制で診療を行っている。
 一般的な皮膚疾患をはじめ、様々な検査・治療手技、手術、救急疾患など多岐にわたり経験可能である。

[研修目標]

皮膚科全般の疾患について知識を得ることと同時に、皮膚悪性腫瘍や良性腫瘍に対する手術療法についても研修可能である。
 当院は日本皮膚科学会により乾癬に対する生物学的製剤使用認定施設であり、それら施設が限定されている新しい治療についても経験できる。
 皮膚科に特徴的な「病状が見える」ことによる患者様の精神的苦痛に対するケアや、共感などについても研修可能である。

[皮膚科専門医取得までの流れ]

2年間の初期研修



名古屋大学皮膚科(研修基幹施設)で最低1年

その他、名古屋大学関連の研修連携施設

皮膚科学会入会から最短5年で
 (研修連携施設4年+研修基幹施設1年)
 専門医取得可能。



手術中



休憩中

いつでも見学に来てね



病棟

[当科の特色]

- ・多数の手術を執刀可能である。
- ・当院には、東海地区を牽引する多数の診療科あり、稀な症例も経験できる。
- ・エキシマライト、ナローバンドUVB、PUVAなど光線療法も積極的に行っている。

名古屋医療センター皮膚科について

令和元年9月現在

皮膚科専門医が3名在籍しており、湿疹、アトピー性皮膚炎、蕁麻疹、薬疹などのアレルギー疾患および細菌、真菌、ウイルス感染症などの一般的な疾患だけでなく、有棘細胞癌・基底細胞癌、乳房外パジェット病など皮膚悪性腫瘍および様々な皮膚良性腫瘍の手術、熱傷・皮膚潰瘍などの処置、膠原病（全身性エリテマトーデス、強皮症、皮膚筋炎、シェーグレン症候群、MCTD、結節性動脈周囲炎）・ベーチェット病・天疱瘡・類天疱瘡といった自己免疫疾患など多岐にわたる皮膚疾患の診療に従事している。

アトピー性皮膚炎に対しては、ステロイド外用療法だけでなく、タクロリムス外用、免疫抑制剤内服療法、光線療法に加え近年適応追加となった生物学的製剤の投与も行い、重症例には入院も含め治療にあたっている。患者様の状態を考慮し環境をはじめとした増悪因子の検索や心理面のフォローなど、QOLの向上にも努めている。

当院は乾癬に対して生物学的製剤の使用施設として日本皮膚科学会より認定されており、患者さんの病態にあわせ治療している。現在使用できる生物学的製剤は8薬剤あり、それらすべての使用経験、実績がある。

悪性黒色腫、有棘細胞癌、基底細胞癌、乳房外パジェット病、皮膚リンパ腫といった皮膚悪性腫瘍に対しては、手術療法、化学療法、放射線療法などを組み合わせ行っている。熱傷、皮膚潰瘍（外傷後皮膚欠損を含む）に対しても、PGE1製剤の注射、外用以外に植皮術などの手術療法を積極的に行い、難治性の皮膚潰瘍には陰圧閉鎖システムを活用もしている。

膠原病などの自己免疫疾患に対しては、ステロイド剤及び免疫抑制剤の内服療法を中心に免疫グロブリン療法なども行い、重症例では膠原病内科と連携し治療にあたっている。

ナローバンドUVBやエキシマライトといった紫外線治療器を用いた尋常性乾癬、皮膚リンパ腫、掌蹠膿疱症、円形脱毛症などの光線療法を行っている。またCO2レーザー、Q-SWルビーレーザーを用いた疣贅、色素斑などのレーザー治療も行っている。

当院はHIV/AIDSの拠点病院のため、他院ではほとんど経験のできないカポジ肉腫などHIV/AIDSに合併する多彩な皮膚症状の診療が可能である。

褥瘡治療・対策にも力をいれ、週1回の褥瘡回診、褥瘡防止対策委員会において皮膚・排泄ケア認定看護師とともに対応している。

名古屋医療センター皮膚科での研修について

A. 専門医研修の教育ポリシー：

研修を終了し所定の試験に合格した段階で、皮膚科専門医として信頼され安全で標準的な医療を国民に提供できる十分な知識と技術を獲得できることを目標とする。医師としての一般的な基本能力を基盤に、皮膚疾患の高度な専門的知識・治療技能を修得し、関連領域に関する広い視野をもって診療内容を高める。皮膚科の進歩に積極的に携わり、患者と医師との共同作業としての医療の推進に努める。医師としてまた皮膚科専門医として、医の倫理の確立に努め、医療情報の開示など社会的要望に応える。

B. プログラムの概要：

当院は 研修基幹施設（主研修施設）として名古屋大学医学部皮膚科を、研修連携施設として名大関連病院（安城厚生病院、一宮市民病院、稲沢市民病院、岐阜県立多治見病院、協立病院、公立陶生病院、小牧市民病院、東濃厚生病院、常滑市民病院、豊田厚生病院、豊橋市民病院、中津川市民病院、名古屋掖済会病院、名古屋第一赤十字病院、半田市立半田病院、南生協病院、名城病院、名鉄病院、愛知がんセンターなど）と連携した研修プログラムに参加している。各研修施設はその特徴を生かした複数の研修コースを設定している。

C. 注意点：

当院は名古屋大学医学部皮膚科研修プログラムにのみ登録しているので、途中から他の研修プログラムへの参加は原則できない。

皮膚科専門医を取得するには、日本皮膚科学会入会から最低5年間の研修指定病院での研修を必要とし、そのうち1年間は基幹病院（主研修施設：当院のプログラムでは名大皮膚科）での研修を必要とする。

つまり、皮膚科専門医を取るためには名大皮膚科での最低1年間の研修が必要であるため、遅くともその時点で名大皮膚科に入局することになる。よって当院で後期研修をスタートし、他の研修プログラムである他大学への入局は原則認められない。

なお、名大プログラムでの研修できる総人数に制限が設けられるかもしれないので、他の関連病院との調整を必要とする可能性もある。

名大での1年間以外の残りの4年間を上記関連病院で研修することになるが、名大に入局した場合概ね2年間で赴任先は変わるので、当院で後期研修医として残ると、当院2年+名大1年+他院2年の計5年が一般的かもしれない。当院1年+名大1年+他院A2年+他院B1年でもよいし、当院3年+名大1年+他院1年でもよいのであろう。

名大だけで5年（研修1年+大学院4年）という選択肢もありえる。

なお、初期研修後、3年目の段階で当院に後期研修医として研修ができるのは、原則当院で初期研修を行った場合のみである。